☆☆授業のヒント

今回は前回に引き続き、教室でビデオ教材をどのように使うかを紹介したいと思います。

テーマ ビデオ教材の使い方（2）

目的
・ビデオ教材を使った教室活動にはどのようなものがあるかを知る。 ・ビデオを使った教室活動をより効果的にする方法を考える。
学習者のタイプ
・初級から上級
クラスの人数
・何人でも
準備するもの
・ビデオテープ、ビデオデッキ、ワークシートなど

前回は、ビデオの内容を理解する力をつけるための活動例とビデオの中に出てくる文法や表現、語彙などの言葉をビデオを見ながら学習する方法を紹介しました。今回は、ビデオを使って、コミュニケーション能力を高めたり、自国の文化や習慣と比較したりする活動を紹介します。

ここでは初級レベルの『みんなの日本語Ⅰ』（スリーエーネットワーク　2001）の13課の会話ビデオを例に、具体的な活動紹介をします。学習者が中級以上の場合は、そのレベルのビデオを使って応用してください。

①誘う場面

山　田：もう12時ですよ。
　　昼ご飯を食べに行きませんか。
ミラー：ええ。
山　田：どこへ行きますか。
ミラー：そうですね。
　　今日は、日本料理が食べたいですね。
山　田：じゃあ、鶴屋へ行きましょう。

（人が鶴屋の前に並んでいる風景と料理のサンプルがフォーカスされる）

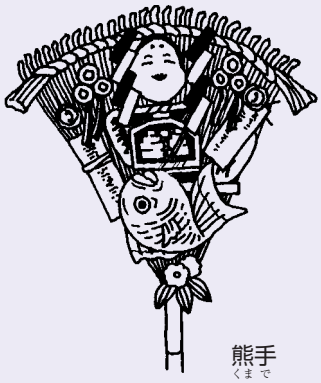
②注文の場面

店　員：ご注文は。
ミラー：私はてんぷら定食。
山　田：私は牛丼。
店　員：てんぷら定食と牛丼ですね。少々お待ちください。

（画面には、お茶やしょうゆの小出し、壁に飾られた熊手が大きく映される）

店　員：てんぷら定食
　　と牛丼です。
山　田：いただきます。

（食べ終わって）



熊手

③支払いの場面

店　員：1680円でございます。
ミラー：すみません。別々にお願いします。
店　員：はい。
　　てんぷら定食は980円、牛丼は700円です。
　　ありがとうございました。

◆コミュニケーション能力を高めるための活動

ビデオの音声を消し、画面に合わせて学生たちにそれぞれの人物の会話を再現させるアフレコという練習方法を紹介します。この方法ではビデオの映像を見ながら会話をするので、学習者は実際の場面にいるように感じながら練習することができます。また、ビデオと同じ時間内に話さなければなりませんから、日本語のリズムに合わせ一定の速さで話す練習にもなります。始めは、日本語のリズムやイントネーションを身に付けるため、音声を消さずに練習するのもいいでしょう。ビデオを何度も繰り返し見せながら練習する代わりに、音声テープを使って十分に練習した後でビデオを利用してもいいです。そして最後にビデオの音声を消して、画面に合わせて会

話練習をします。

さらにビデオの会話の一部をかえて、会話をさせることもできます。ここでは、山田さんがミラーさんを誘う場面①を使ってみましょう。まず、「12時」「昼ご飯」「日本料理」「鶴屋」という単語を学習者の現実の生活に合わせてかえるように指示します。昼ご飯または晩ご飯に誘う場面にして、時間、食べたい物、店の名前を変えれば、学習者は実際に近い会話をすることができます。ただ、ここで注意しておきたいのは、食堂での注文場面以降（②と③）は使わないようにすることです。なぜなら日本料理の店の画面を見ながら、ほかの料理を注文するのは不自然になるからです。

食事に誘う会話がスムーズにできるようになったら、この会話の型を利用して、映画やコンサート、ピクニックなどに誘う会話を練習してもいいでしょう。その場合、山田さんの最初の発話「もう12時ですよ」を「明日は日曜日ですね」のように変える必要がありますので気をつけてください。

また、ビデオの会話だけでなく映像から得られる情報も含めて内容を描写させるという活動もできます。例えば、ビデオを見ていない人にどんな会話ビデオであったかを説明するタスクなどが考えられます。

◆自分の国の文化や習慣とを比較する活動

ビデオを使って日本と自分の国の文化や習慣を比較する活動を行う場合、一番ポイントとなるのは、学習者自身にその違いに気づかせ、そしてそれがどうしてなのかを考えさせることです。教師が説明するのは簡単ですが、文化や習慣の違いにより敏感になり、教室外でも自分で観察、分析できる学習者を育てるためには、学習者自身に考えてもらうほうがよいでしょう。そのほうが、学習者も積極的に授業に参加できます。では、同じ『みんなの日本語Ⅰ』の13課のビデオで何ができるかを考えてみましょう。

まず、ビデオを見せると、自国にはない珍しい物が学習者の目を引くことでしょう。ビデオを見る前に、何かわからない物が出てきたときには手を挙げるよう、学習者に指示しておきます。学習者の手が挙がったら、教師は映像を止めて物の名前の導入をします。例えば13課には、商売繁盛を願って店に飾る熊手が出てきます。「熊手」という名前を導入したら、次に、それが何をするためのものかを考えさせます。大切なのは、それが何なのかを学習者が考えるプロセスなのですから、学習者のレベルによっては日本語だけでなく母語を使ってもいいと思います。始めはなかなか出てこないかもしれません。そういう時は、教師からヒントを出しましょう（例「この熊手は、何かに似ていませんか」「この熊手はお店をやっているところにあります」）。さらに、正解が出たところで、自分の国に商売繁盛を願う飾りや、習慣がないかを考えさせます。

人々の行動様式の場合も同じです。13課の場合、食堂の前で人が並んでいるシーンがありますが、日本ではこのような光景をよく見かけます。国によっては、食堂に入るために並ぶという習慣のない国もあるでしょう。また、食べる前に「いただきます」というあいさつのない国や、友達や会社の同僚と食べに行ったとき、別々に払わないで一人がおごるという習慣の国もあると思います。学習者にはビデオを見て不思議に思った行動を挙げてもらい、どうして日本人はそうするのかを考えてもらいます。その際、自分の国ではどうするか、そしてなぜそうするのかも考えてもらいましょう。すぐに答が出ない場合には、両方の国の習慣や行動様式の良い点と悪い点を考えて出してもらいます。たとえば、「並ぶと時間がかかる」（悪い点）、「おいしいものが食べられる」（良い点）のように、良い点と悪い点を分けてまとめていきます。

ただ、気をつけなければならないことは、文化や習慣には、ただ一つの答や正解があるとは限らないことです。ですから、学習者から納得できる答が出た場合には、「そうかもしれませんね。よいことに気がつきましたね」と受け入れましょう。そうすることによって、学習者は徐々に自分で何かわからない物や不思議な習慣や行動を見たり、経験したりしたときに、自分で考え分析するようになります。

最後に、事前準備として、ビデオを通して学んでもらいたいものを明確にしておくことと、教師自身がわからないものがある場合は、日本人に聞いたり、インターネットや本などで調べておくことも大切です。

参考文献

1.『視聴覚教材とその使い方』NAFL Institute 日本語教師養成通信講座

2.『視聴覚メディアと日本語教育』NAFL Institute 日本語教師養成通信講座

小玉安恵、阿部洋子（日本語国際センター専任講師）

読者の皆さんからのアイディア、成功例、失敗談などぜひお寄せください。